

欧米で働く 日本人土木技術者の 事例集

土木学会

土木グローバル化総合委員会
土木技術者の国際化実践小委員会

Aさん

業種：**ゼネコン**

専門分野：**土木工学**

年齢：**20代**

形態：**現地企業への就職**

これまでのキャリア

- 英国の大学の土木工学科卒
- 大学在学中の夏休みにエンジニアリング・コンサルティング企業にインターンシップ
- インターンシップを行った企業に就職
- 橋梁設計を担当（4年間）
- ゼネコンに転職
- 現場監督を担当

【土木技術者を志した理由】

- 英国では土木は人手不足の業界ということもあり、政府や学校が土木技術者を招いて生徒や学生向けのワークショップやクラスを開いて普及活動を行っている。そこで興味を持ったことや数学が好きであったことなどを理由に、大学で土木を学ぶことを選んだ。
- 土木は英国の大学で人気の学科であるが、卒業後には給与の違いを理由に銀行や他業種のコンサルタントなどに就職してしまう人が多い。強い思いがある人がそのまま土木業界に就職する。

【英国で働くことになった経緯、判断の分岐点等】

- 日本で生まれたのち、日本とアメリカで育ち、16歳で英国に移住。
- 大学進学にあたって日本やアメリカに行く選択肢も考えたが、システムに慣れており、友人も多い英国に残ることを決断した。

【英国での業務内容】

- 最初に就職したエンジニアリング・コンサルティング企業では英国国内の橋梁や英国高速鉄道HS 2のデザインに携わった。
- 2023年1月にゼネコンに転職してからは、現場監督としてホテルの建設に携わっている。

【将来展望】

- 英国には10年住んでおり、住みやすいと感じているため、しばらくは英国で生活したいと考えている。
- 英国では大学で土木を専攻後、社会経験を積んでいる間に「チャーターシップシステム」という土木学会の資格取得のシステムがある。仕事上や転職にも有効な資格であるため、当面はそれを取得することが目標である。

2. 英国の土木業界の労働環境／働き方

英国の土木業界の労働環境

【職場の雰囲気】

- 現在のゼネコンではチームのほとんどが外国人である。移民が以前から増えているので、英国の人々も慣れている。会社にもよると思うが、外国人と働くのは当たり前の環境である。
- 外国人同士で働く際の壁はなく、お互いのカルチャーを学ぶなど楽しいこともある。同僚同士で集まる機会も多い。
- 外国人従業員への特別なケアは存在しないと感じる。

【勤務時間・残業】

- 勤務時間は週37.5時間、一日平均7.5時間である。
- 以前のコンサルティング企業では9時～17時半、現在のゼネコンでは7時～18時が定時。建設現場は事前に計画されている場合を除き、18時以降の稼働はできないことになっている。
- 英国の人は残業が嫌いで、定時で帰ろうとする人が多い。定時内で終わる量の仕事を与えられている印象である。
- 会社によってはオーバータイムレートを設定して、残業をする場合に給与を上げるシステムもある。

【福利厚生】

- 家賃や交通費の補助は会社による。現在の会社では通勤距離などの条件付きで家賃補助や交通費の補助がある。
- 1時間前後の時間をかけて通勤する人が多いが、公共交通機関の費用が高いため補助がないと厳しいのが現状である。

【休暇】

- 法律で正社員は年間28日の有給休暇がある。以前の会社では給与を減らして、休暇を45日に増やす制度もあった。
- 休暇は文化的に大切に、休暇の話は同僚間でも頻繁にする。

英国の土木技術者の働き方

【キャリア形成】

- 若い時からキャリアについて考え始める人が多く、自分でキャリアを築く意識がある。自分のやりたいことが今の会社でできないと感じたら、あきらめて転職先で実現しようとする意識が強い。
- 会社によって転職者数の多寡は異なるように思う。英国では現在インフラプロジェクトが盛んでエンジニアが足りないため、より給与が高い会社に移るために転職する人も多い。
- 転職が多いと新しく入った方に学んでもらう期間が必要なため、スムーズにオペレーションができないこともある。日本のように転職者が少ない方がいい場合もあると思う。

【技術・スキル】

- 日本で働いたことがないので比較できないが、英国でも日本企業のテクノロジー（日立の原子力発電、電車等）は優れているイメージがあるため、土木技術も優れているイメージがある。
- 英国のエンジニアリング企業も香港やオーストラリアには参入できるが、日本市場にはバリアがあると感じているという話も聞く。
- 日本の技術士資格にあたる英国の「チャーターシップシステム」の資格は大学卒業後5～7年で取得する人が多い。土木学会の方は実務経験と面接で審査され、合格率は高い。建物学会の方は試験があり、比較的合格率が低い。

【グローバルトレンドへの対応】

- 以前は安全対策が注目されていたが、最近はSDGsやカーボンニュートラル、サステナビリティ・オブ・デザインがトレンドである。
- 会社としてポリシーステートメントに掲げるほか、個々の技術者がプロジェクトの中で取り入れる努力をしている。

3. 英国で働くための準備／生活環境

英国で働くために行った準備等

【情報収集】

- 英国では転職者が非常に多いので、転職サイトやエージェントも多数ある。PCとネットがあれば日本からでも仕事を探すことは可能であり、日本で行っていた仕事内容によって適した現地企業をマッチングしてくれるエージェントもいる。
- 採用にあたっては、もともと英国に住んでいる人を採用する方が会社としては簡単であるが、人が見つからない場合や優れている人に関しては外国から採用する場合もある。人手不足が続いているため、外国から採用されている人も一定数いる。

【英語力】

- 仕事も生活もすべてが英語なので、英語は大切である。
- 日本の義務教育で学ぶレベルでは足りないので、クラスやレッスンを受けることは必要と感じる。実践的な英語は英国に引っ越してからでも勉強できると思う。
- 特に土木工学のテクニカルな内容に関する会話を英語で行うことは難しいと思う。数か月かけて働きながら学ぶことで、ある程度習得できるようにはなると思う。
- ロンドンは移民が多く、英語が得意ではない人もいるので、言語だけで不利になることはないと思う。中国やオーストラリア、東ヨーロッパなど世界中から人がきているので、お互いに気を使いながらコミュニケーションをとっている。

【その他】

- 英国の大学で土木を学んだことで適用しやすい面もあると思う。日本のシステムで土木を学んだ人の場合は、適用に苦労する場合もあると思う。

【ビザ取得・資金準備】

- ビザ手続きは面倒な面もある。自分は学生ビザの後にスキルドワーカービザを取り、永住権を取得した。
- 日本から就職する場合には、外国人採用のためのスポンサーライセンスを取得しており、ビザを手配してくれる会社を探す必要がある。土木は人手不足業界リストに入っているのでビザ取得のハードルは低いが、ビザ費用を払ってくれる会社を探すのは難しい。会社としてはコストが上がるので、外国人を雇いたくない会社も多く、ビザを理由に就職を断られることも多い。
- 最近では英国の大学を卒業した人が数年間就業可能なビザが創設された。しかし、永住権を持っていないと長く働くのは難しい。移民を減らしたい現政権の政策も関係している。
- ビザの取得も会社によっては全てサポートしてくれるところもあるが、自分の会社は全て自分でやる必要があった。

英国の生活環境

【物価水準】

- 個人的には家賃、交通費、食費は日本の方が安いと感じる。
- 家賃はロンドンで特に高く、郊外の場合は少し下がる。

【交通・公共サービス事情】

- 国民年金や医療費無料は税金を納めていれば恩恵を受けられるが、永住権がないと他の社会サービスは受けられない。
- 公共医療サービスは無料ではあるが、2段階システムになっていて専門医の診断が受けられるまでの待ち時間が長い。プライベートな医療サービスは高く、医療システムは日本のが良い。

【治安】

- 日本ほど安全ではない。道や公共交通も綺麗ではない。

4. 日本の土木業界のグローバル化推進に向けて

英国から日本の土木業界をみて感じる強みや課題

【強み】

- 英国から見ると日本の土木技術は基準などが細かく規定されており、技術面も進んでいるというイメージがある。
- 日本の土木市場は外国のエンジニアリング企業が進出するのは難しいというイメージがある。土木と建設に対する考え方が違うことから、リスクが高いと判断する企業が多いと聞く。

【課題】

- 日本企業のやり方は英国とは違うと思うが、他国のエンジニアリング企業がどのようなことをしているかは勉強した方がいいと思う。
- 日本企業の多くは日本人がほとんどという環境でやっていると思うが、英国では100年前から移民が増えてきた中で、文化や働き方が変わってきた部分があると思う。今後移民を受け入れていく可能性がある中で参考になる部分もあるのではないか。
- グローバルトレンドへの対応について、英国では個々の技術者や発注者が一体で取り組む姿勢がある。例えば、地球温暖化への対応方針は各土木プロジェクトの中で議論をしないとイケないシステムになっている。国や会社が掲げているポリシーステートメントを一人一人が理解しており、コーヒブレイクでカーボンニュートラルについてフランクに話題に上がるほど個々の関心が高いと感じる。対応によって整備コストが上がる場合でも発注者がその費用は出すという姿勢である。（日本の場合はB/Cが合わないと採用されない）
- 英国では個々の技術者が、会社や土木学会などが開催する研修やセミナーに積極的に参加して個人レベルでグローバルトレンドに対応するための知見をアップデートする姿勢も強いと感じる。特に若い人向けのものは多く、オンライン等でも頻繁に開催されている。学会活動は土木業界内でネットワークを広げるにも有効なので積極的に参加している人が多いと感じる。

今後海外で働くことを目指す土木技術者へのひとこと

- 土木技術者は世界のどこでも働くことができると思うので、そのポテンシャルをもっと使いこなして、英国で働く日本人技術者がもっと増えてほしいと思う。
- 英国で土木技術を学んだ人も海外で働く意欲が高い人がおり、アメリカやカナダ、香港等に行く人が多い。国によっては給与面もいいと聞くので日本人にも挑戦してほしい。

事例集（国名：英国）

Bさん

業種：**ゼネコン**

専門分野：**土木設計**

年齢：**60代**

形態：**現地協力会社への出向（駐在）**

これまでのキャリア

- 日本の大学の工学部土木工学科卒
- 日本のゼネコンに就職
- 土木設計部門にて主に国内プロジェクトに従事
- オランダに留学（2年間）
- 帰国後、海外プロジェクトに多数従事
- 英国の設計コンサルタントに派遣（3年間）
- 帰国後も海外プロジェクトに従事
- 定年後、日本の建設コンサルタント会社に転職

【土木技術者を志した理由】

- もともと南極に興味があり理学部を志望していたが、浪人中に報道で青函トンネルのニュースを見て興味を持ったことをきっかけに、土木工学科に進学。研究室では海岸災害部門を専攻した。
- 卒業後はゼネコンに入社し、土木設計部門で約18年間、海外プロジェクトに約17年間従事した。専門は港湾・海洋・河川構造物や橋梁基礎・仮設構造物など。

【英国で働くことになった経緯、判断の分岐点等】

- 海外設計施工プロジェクトに共同で携わった英国の設計コンサルタントとの協力体制再構築の一環として派遣された。
- 港湾・海洋分野における10年以上のマネージャー経験が出向者の条件であり、人選に先立ち詳細な業務経歴書(CV)を提出し、先方の同意を得た。それまでに同社と共同作業を行った経験があったことも抜擢の理由だと思う。（電話面談も選考に含まれていたが既知であったため省略された）
- 同社以外にも英国コンサルと海外設計施工プロジェクトでの共同作業経験が複数あり、その経験が結果として派遣に繋がったと感じる。

【英国での業務内容】

- 主として施工計画・工程・工事費の予備検討及びリスク評価を担当した。具体的には英国新幹線（HS2）の予備設計、環境影響評価・国会への議案上程準備等に携わった。

【将来展望】

- 定年を迎えてまだ元気なので、年齢が許す限り海外プロジェクト業務に従事したい。（現在はコンサルとして海外鉄道案件に従事）

2. 英国の土木業界の労働環境／働き方

英国の土木業界の労働環境

【職場の雰囲気】

- 各人が自分の担当職務・分野に特化し、他グループ・分野にまで視野をあまり広げない傾向を感じた。その分、全体をコーディネートするマネージャーにはかなりの負担が強いられていたと思う。

【勤務時間・残業】

- 週5日、7.5時間/日、37.5時間/週のフレックス勤務制で、コアタイムは9:30～16:30であった。
- 派遣先のビルは7:30～20:30が開放時間帯であり、それ以外の時間は事前の届け出がなければ強制退館させられた。
- 残業は基本的に上司（業務によっては更に発注者等）の許可が必要であったためか、若者は定時就業が多かった。残業代の支給されないマネージャークラスは時間外の仕事もかなりしており、遅くまで残っていた。
- ただし、派遣当初は大規模案件の提出物〆切が間近に迫り、全員がほぼ毎晩終電帰宅といった感じで残業をしていた。

【休暇】

- 有給休暇は100%取得が半ば義務化していた。
- 2013年時点で父親の育児休暇制度もあり、同じグループ内にも取得者がいた。

【福利厚生】

- 派遣先が比較的小規模の会社であったため、寮・保養所などは無かった。
- スポーツイベントや地域社会への奉仕活動・チャリティ活動への参加は積極的だった。

【給与水準・雇用の安定性】

- 建設系設計コンサルタントの給与水準は概して高く、特に、海外勤務の場合に顕著だと感じる。携わった海外設計施工プロジェクトで、自社職員が協働の英国コンサルに転職し、引き続き同事務所内で働いていた例もあった。
- 人事考課は年2回あった。海外企業の場合、経営状態によっては解雇といった事も想定されるが、少なくとも出向中には見られなかった。

英国の土木技術者の働き方

【キャリア形成】

- 派遣先では若手職員に一人の社内指導員 (Mentor)がついて業務を通じたキャリア形成のプログラムを作成し、面談やトレーニングを継続的に行っていた。CEng (Chartered Engineer) 資格の取得が一つの目標として掲げられ、1対1できめ細かな助言 (OJT、社外研修の計画・進捗確認等)を行っていた。
- ICE (土木学会) の研修に参加する人も多かった。
- 若い人は3～5年で他のコンサルへ転職しながらキャリアアップしていくケースが多く、他のコンサルからくる人も含めて人の動きは頻繁にあった。細かな引継ぎまで行っている印象はなかったが、仕事は数人のチームで行い、残ったチームメンバーがカバーをしていたと思う。
- 転職者が多い反面、1つの会社に長く留まる人材も一定数いるようであった。

2. 英国の土木業界の働き方 / 3. 英国で働くための準備

英国の土木技術者の働き方（続き）

【技術・スキル】

- 英国の技術基準はBritish Standard(BS)やユーロコードが主である。日本の技術基準と比べて、定式化や係数値など細部で差異があるものの、耐震基準など特定の分野を除けば、根底にある概念には大きな差はない。普段設計実務を行っている人であれば、一度設計演習を行えば比較的容易に身に付くと思う。身構える必要はないと思う。
- 日本の技術士に相当する土木部門のCEng (Chartered Engineer)は、土木学会に相当するICE (Institution of Civil Engineers)が取得に至る種々の道筋を示すと共に、様々なトレーニングセッションや地域セミナーを開催している。なお、CEng取得・維持には認定技術機関の会員であることが必須であり、土木部門ではICEが最有力機関といえる。

【グローバルトレンドへの対応】

- ICEの職員は多国籍であり、ウェビナー等を通じて先端技術についてオンラインで世界に発信している。
- また、主だった設計コンサルタントや建設会社とともに世界各地に展開しており、本国職員を派遣しつつ、現地スタッフも多数雇用している。

英国で働くために行った準備等

【情報収集】

- 出向先の企業についてはそれまでの共同作業の経験から、ある程度の予備情報は保有していた。出向決定後は、同社および自社ロンドン事務所とやり取りをして必要情報を入手した。

【英語力】

- 渡英以前の約11年間に亘る海外勤務や留学を通じたOJT、PE取得によって英語力を養った。
- 初めての海外プロジェクトは30歳のときに携わったバングラデシュでの橋梁工事で、それに先立ち3ヶ月間語学学校で英語を勉強する機会があったがあまり上達せず、実際に少しずつ話せるようになったのは業務を通じてであった。
- 海外設計施工プロジェクトにおける英国コンサルとの共同作業の中で、毎日朝から晩まで折衝をしたことが、英語力の取得に繋がったと感じる。
- Professional Engineer (PE) 資格取得にあたって英語の専門書や技術書を勉強したことが土木関係の専門用語を身に着けるうえで役に立った。

【ビザ取得・資金準備】

- 出向が決まってから出国まで約9ヶ月の準備期間があったため、自社ロンドン事務所等の支援を受けて諸手続きを行った。
- 2012年当時、オンラインで申請書類を準備し、Tier 2 (Intra-Company Transfer) のビザを取得した。数ヶ月かけてVisa Application Formや派遣元のスポンサーシップ保証書を含む必要書類を揃えてUK Visa Application Centreに提出し、約2週間でビザを受領した。

3. 英国の生活環境

英国の生活環境

【住宅・食事情】

- 当時住んでいたのはWimbledonにある築150年の3寝室のテラスハウスで、2012年当時の家賃は月£1,900であった。
- 日本人学校のあるEaling近郊は日本人居住者が多かった。
- 日本同様、不動産会社は各街にあり、店頭写真付きで物件が紹介されている。ロンドンには日系の不動産店舗もある。
（一般に古い家が多く、不具合が生じやすいので、その際の対応を考えると日系不動産事業者の方がやや安心か）
- 家族5人で赴任しており、子供の教育は2年半という期間だったこともあり、現地の日本人学校に通わせていた。インターナショナルスクールに入れる人もいた。

【物価水準】

- 物価は概して東京より高めに感じた。スーパーも東京よりも高く、毎月持ち出しが発生していた。

【交通・公共サービス事情】

- 鉄道やバスなど公共交通機関は発達しており、多くでICカードが利用可能（ロンドンではOyster Card）。但し鉄道は遅延が多いほか、天候（特に雪）やストライキ等で時々運休となる。乗車中に理由も分からず突如行き先が変わることもあり、ボヤッとしていると目的地と異なる所に行ってしまうこともあった。
- 電気・ガス・水道・電話・インターネット・テレビは個別契約で大抵のものはオンラインによる支払いが可能。
- 銀行口座はオンライン申請・予約後、窓口に出向いて手続き。
- 運転免許証の書き替えは日本大使館にて英文証明を発行後、運転免許庁DVLAにて申請した。駐車は通常は路上。

【交通・公共サービス事情】

- 税金は派遣元負担であったが、入国後および年1回はErnst & Young社による実態調査があった。
- 福祉国家の英国であるが、自分の場合は医療費は日本の健康保険組合からの実費支給であったため恩恵はなかった。

【治安】

- 2014年頃にパリやロンドンで自爆テロが発生した時期があったことを除いて、凶悪犯罪は比較的少ないと感じた。コソ泥などの軽犯罪が発生したという話は日本よりもよく耳にした。
- 自家用車を自宅前に駐車していたところ夜に運転席側のガラスを砕かれ、カーナビの盗難に遭った。日本製ホンダ車だったことからガラスが日本からの取り寄せとなり、修理に時間がかかった。車を離れる際には車内に決して物を残してはいけないと学んだ。

【英国で働いていて／暮らしていて感じる魅力や苦勞】

- 魅力としては、日本とは異なる歴史・文化・芸術・自然の見どころが豊富なところや、緑が豊かでロンドンの自宅の庭にまでリスやキツネが、公園には野生のウサギが多数現れるところがあった。また、紳士・淑女のお国柄だけあって、人々がさりげなく親切であったと感じた。
- 苦勞としては、日本と同様のきめ細かなサービスは期待できず、自ら行動を起こさないと物事が前に進まない、フィッシュ・アンド・チップスを除くと（？）味覚に合わない事が多いこと等が挙げられる。スーパーで買ったパンも賞味期限切れかと勘違いするほどパサパサであったりした。（“French live to eat, British eat to live.” というエスニックジョークもあるようである）

4. 日本の土木業界のグローバル化推進に向けて

英国から日本の土木業界をみて感じる強みや課題

【課題】

- 英国企業は英語が母国語で言語面のアドバンテージがあることをさておいても、売り込みや折衝が積極的で上手であると感じる。海外大規模プロジェクトでは、企業レベルだけでなく、政府レベルで積極的に売り込みを行う国も散見される。ある案件では、競合相手国の大使自らが発注者トップを公式訪問して受注に結び付け、一企業連合として大きなハンデを感じたこともある。日本の土木業界の海外展開支援に向けては、国レベルでの売り込みや交渉も今後さらに重要性を増すと感じる。
- グローバル市場で打ち勝つには、顧客の求める必要最低限の品質は確保しつつも、素早い対応を行うことが今後ますます重要になると思う。中国・韓国・台湾などの新興国の建設会社もプロジェクトを進めるうえでスピード感に溢れ、コスト面でも差をつけられてしまうので競争が難しい。品質面での問題は確かにあるものの、発注者がどこまでの品質を求めているか次第では、多少品質が劣っても積極的に売り込み素早い対応をする国の方が有利になるケースも多い。
- グローバルにプロジェクトを行っていくうえでの体制構築も重要である。英国の設計コンサルは世界にネットワークを広げ、現地採用によって人材を確保している。日本企業も時間はかかると思うが、M & Aなども視野に入れつつ展開していくチャンスはあると思う。その際、プロジェクトを途切れさせずに一緒にやっていくことでノウハウや人材を蓄積していくことが大切ではないか。人の入れ替わりの激しい英国企業でも、結局会社のコアとなっているのは長く勤めている人材であると感じた。
- 英国では設計コンサルなどの土木エンジニアの社会的ステータスが高く、英国土木学会（ICE）の中でもコンサルの発言力は強いと感じた。日本も英国に比べて技術的に劣っているとは決して思えず、社会や企業の現行制度・仕組みをグローバル化に適合するよう発展させることができれば、エンジニアが更に自由に羽ばたく一助になるのではないかと感じる。

今後海外で働くことを目指す土木技術者へのひとこと

- 今の若い人の方が言葉もできるし、昔に比べて情報も得やすいので海外で働きやすいと思う。
- 準備としては以下の2点を推奨したい。
 - 英文の業務経歴書（CV）の作成・更新。（部署・地位のみでなく事業規模・業務内容など詳細に記載。業務ごとに更新する。）
 - 余力があれば、FEやPEに挑戦。（資格取得の過程で専門用語やその言い回しが会得でき、技術文書やレターなどにも役立つ。）

事例集（国名：英国）

Cさん

業種：**建設機械メーカー**

専門分野：**コンクリート工学**

年齢：**40代**

形態：**現地法人への赴任（駐在）**

これまでのキャリア

- 日本の大学の工学部土木工学科卒
- 無公害工法・産業機械の研究開発や製造販売を主体とする日本の機械メーカーに就職
- 国内営業業務に従事
- ヨーロッパ現地法人のロンドン事務所に異動（7年間）
- 帰国後、某学会事務局に勤務（3年間）
- 同社の北海道営業所へ異動

【土木技術者を志した理由】

- 幼少期を過ごした故郷（日本屋内）では土木産業が盛んだった。
- 高校在学時に現在勤める会社で製造する建設機械および土木事業に興味を持った。将来的に同社で働きたいと思い、大学では土木工学科を専攻した。

【英国で働くことになった経緯、判断の分岐点等】

- 同社に無事入社。配属後は国内を担当する技術営業として自社の建設機械を使用した施工方法の提案、施工計画や積算・見積り、案件対応など機械メーカーに在籍しながら、土木分野に関する実務に従事した。30代前半にて海外勤務に従事する機会があり、同社の欧州現地法人に技術担当のマネージャーとして配属された。

【英国での業務内容】

- 独自の施工技術を公共・民間工事に取り入れてもらうため、官公庁や設計会社などへの技術提案に従事した。その傍ら、機械・保守部品販売やレンタル、専門工事の請負など、幅広く活動した。
- 専門工事の請負においては、日本と慣習・法令が異なるため、作業員や資機材の手配・調達にたびたび苦労した。また、大規模事業に関わった時期は多忙であった。
- 在任中、現地法人の従業員数は20名程度、そのうち、日系駐在員は3～5名であった。日本からの連絡は日本語が多く、技術資料の多言語化を進めていたこともあり、英語への翻訳なども対応した。

【将来展望】

- 再度、海外赴任したいと考えている。
- 自社技術に関する施工事例などを論文として執筆（日・英語）。

2. 英国の土木業界の労働環境／働き方

英国の土木業界の労働環境

【職場の雰囲気】

- 職場および関連会社間の雰囲気は良い。しかしながら、多国籍であり、いわゆる「暗黙の了解のうえでの合意」などは皆無である。このため、意見や意思を発信することは大事である。
- 関係者とは対等な関係で、ランチミーティングも多い。顧客を含めた関係者との距離は近く、名前で呼びあうことは多い。
- 事務所・工事現場ともに労働環境は整っていた。

【勤務時間・残業】

- 勤務時間は8時～17時。大多数の英国雇用者は残業せず、生活や家族と過ごす時間を優先する。行き過ぎると、業務が完了せずとも定時で帰社する従業員があらわれ、駐在員にて残務を補填しなければならない（毅然として意思を伝えることは重要である）。なお、勤務時間内に働いて終わらない仕事量を与える上職のマネジメントを問題視する雇用者は多い。
- 採用の段階で業務内容と対価が明確である。極論、契約書に記載のない業務は正当な理由や追加手当がない限り、行わない。現場も分業制であり、複数兼務することはほぼない。

【福利厚生】

- 産休制度の充実など、女性への社会福祉が手厚いと感じた。

【給与水準・雇用の安定性】

- 土木技術者の社会的地位が確立されている。給与水準、待遇は日本と比較して高いと感じた。
- 個々の職務に応じ給与が設定されている。同じ会社で同じ業務内容、標準的な成果を上げ続けても昇給の機会はない。

英国の土木技術者の働き方

【キャリア形成】

- 社会において経済的格差は日本の比ではない。キャリア形成に貪欲な人は日本より多いと感じた。また、自分に合わなければあっさり転職するという思考の雇用者が多いと感じた。
- 日系企業は終身雇用を旨とし、技術者の育成に時間を懸ける傾向が強い。他方、転職が一般的な欧米において、キャリア形成のために技術者が転職を嗜好することは当然のことだと思う。日系企業が海外で事業を展開するには、まずは諸国の雇用状況を精査し、理解することが肝要だと思う。

【技術・スキル】

- 技術力に矜持をもち、責任感をもって仕事を遂行するエンジニアが多いように感じる（反面、主張が強い傾向もある）。学術活動や自己研鑽に取り組むエンジニアも多い。
- 学歴と人脈が重宝されると感じた。出身大学により形成される技術とネットワークを仕事に生かしている。
- 設計会社が総合建設会社に仕事を発注することにより、設計から施工、管理まで一式で民間工事を受注することは多い。責任施工の案件も多く、割高でも質の高い施工技術への関心は高い。契約時におけるリスク回避を熟知している。

【グローバルトレンドへの対応】

- 環境への影響に配慮し、建設機械の排ガス規制は厳格である。他方、エネルギー問題に直面した際に、原子力発電をクリーンなエネルギーとして位置付けるなど、社会情勢に応じて寛容に受け入れる土壌はある。
- 3次元測量と設計技術、BIMは以前より導入されている。

3. 英国で働くための準備／生活環境

英国で働くために行った準備等

【情報収集】

- 会社が赴任のための準備をどの程度ができているかにより、駐在する本人の準備にかかる負担は差異がでる。自社の場合には、ビザ申請の代理店および諸手続きなどはある程度決まっており、さほど苦労はなかった。
- 政治により、就労ビザに関する制度が急変する。このため、派遣国の社会情勢などは注視しておくべきである。

【英語力】

- 英語は赴任が決定したときにあらためて勉強した。赴任後、3年間はインプット・アウトプット共に苦労した。
- 英語を母国語とする純粋英国人や、口数の多いインド系英国人の方々との会話に苦労した。英語を語学として学んだ欧州諸国やアジアの方々との会話は比較的容易であった。
- 語学力は必要だが、仕事においては流暢にしゃべるより、「伝える内容」が重要だと思う。そのためには、エンジニアとして核となる技術を身に付けておくことが重要だと感じた。
- 英国でエンジニアとして働きたい場合は、英国の大学で修学の方が効果的だと思う。修士課程からでは学問の習得・語学の上達には十分な時間が確保できない。可能であれば学部から留学することが望ましいという話を聞いたことがある。

【ビザ取得・資金準備】

- 当時はTier2（Intra-company Transfer）のLong-term Staffのビザで5年を超えて就労が可能であった。
- 英国であれば、日系企業が駐在員のビザを取得することは比較的容易であると思う（両国間の関係に影響される）。

英国の生活環境

【住宅・食事情】

- 暮らしぶりは、先進国のなかでも比較的良いと感じた。
- 英国は食事がおいしくないと誇張されているが、ロンドンのような他民族都市には多国籍な飲食店は多く、食事で困ることはなかった。

【休暇】

- 有給休暇を使ってまとまった休みが取れるのはよかった。
- 祝日は数えるくらいしかない。土日祝日を含めた休日数は、日本が圧倒的に多い（年間の就労日数は英国が多い）。

【物価水準】

- ポンドが強いため、円換算すると年収などは高所得に感じられるが、物価が高く生活費も日本と比較して割高である。7年在住したが、生活水準は日本とたいして変わらないと思う。

【英国で働いていて／暮らしている感じる魅力や苦労】

- 最初の3年は生きることに精一杯であったが、4年目から色々と分かるようになり、楽しさや働きやすさも感じられた。
- 島国ではあるが他国へは容易に往来が可能である。
- 建造物や習慣、緑豊かな公園から、現代と伝統の両方を味わいながら生活できる。

4. 日本の土木業界のグローバル化推進に向けて

英国から日本の土木業界をみて感じる強みや課題

【強み】

- 自社の場合、創業者の熱意を核として海外事業の展開を進めた。欧州に事業を展開した理由は、独自技術に関するケンブリッジ大学との共同研究、ドイツで開催される世界最大規模の建設機械に関する見本市「バウマ」への出展をきっかけとした伝え聞く。海外市場における重機は大型かつ頑強であるが、軽量・コンパクト、小回りが利くものは少ない。日本国で発祥し、培われた技術を有する個性的な建設機械や施工技術は日本の土木業界がもつ強みであり、自社製品が「現代」と「伝統」の両方の構造物を併せ持つ英国の建設市場に適合できたと思量する。但し、日本での成功体験が必ずしも欧州で通用するわけではないことも留意すべきである。

【課題】

- 日本の技術者の場合、仕様規定に慣れているので、仕様書通りにやっていれば想定外の出来事が生じた場合にも基本的には発注者の責任で事業が進む。守られた環境下でのエンジニアリングに慣れており、契約や予期せぬ事態におけるリスクヘッジは不得意だと思う。こういった国内の慣習が日本の総合建設業者や設計会社が海外進出を行う際の障壁になっていると感じる。グローバルで活躍する海外のゼネラルコントラクターには国境を感じさせない行動力と構造物を完成させるノウハウがある。
- 日本は使用規定が基本であり、積算単価が安価な工種・施工方法を発注者が好んで選択する。他方、英国では性能規定が基本で、施工業者が工費や工期を減らす工夫を行うために新しい技術を積極的に活用することへの関心が高い。
- 日本は、高い技術を諸外国に喧伝し、定着させる活動が十分でないことを残念に感じる。工種ごとの設計指針など技術的に価値のある文献が、多言語化する努力もなく内需のみに使用されている。欧米企業では、ユーロコードなどに自社に有利な基準を折り込むためのロビー活動を行う会社があると聞く。有利な基準作りは海外における事業展開において強力な武器となる。このような基準に関する環境を整備することは、日本の土木技術を海外に展開していくうえで有効な手法の一つだと思う。
- 民間・公共工事に関する発注の過程が国により異なる。工事の受注に関しては、設計から施工まで一括して担うことが可能な企業であることが、海外市場の競争に勝つ重要な要素の一つだと思量する。しかしながら、日系企業が個々で勝負するには限界がある。例えば、各社の持ち味を合わせた日の丸共同企業体を組織し、海外事業を展開することも一案である。
- 大学の教育課程にも相違がある。日本では概念論を中心に学ぶのに対して、英国では設計などを実践的に教えるので大学を卒業した技術者は即戦力になると聞く。

- 興味のある人はとりあえず行ってみたほうがいい。準備するに越したことはないが、英語が流暢になってから行くというのも難しいので、まずは飛び込んでみてほしい。くじけないためには熱意が大事だと思う。

Dさん

職 種：技術職
年 齢：40代
形 態：グループ会社への出向

これまでのキャリア

- 日本の大学の土木工学科卒
- 日本で民間企業に就職
- 国内業務を担当
- 海外駐在（2年間）
- 国内業務を担当
- 海外グループ会社で勤務（3年間）
- 海外勤務を終え帰任

【土木技術者を志した理由】

- 小さい頃に船上から工事中の本州四国連絡橋を見たことが印象に残り、漠然とした憧れのような思いがあって土木工学科に進んだ。

【英国で働くことになった経緯、判断の分岐点等】

- 赴任前は国内業務を担当していたが、海外駐在経験があったことなどが海外グループ会社勤務を命じられた理由ではないかと思う。
- 選択権を与えられたが、挑戦の機会と捉えて受けた。

【英国での業務内容】

- 出向先のグループ会社は日本人が在籍せずに経営されていたため、グループ内のコミュニケーション強化策の一環としての赴任であった。
- 社外向けの業務には、具体のプロジェクトに関するものはなく、日系企業向けの広報や営業のような活動を行った。

【将来展望】

- 現在は日本に帰任しており、海外勤務の経験を日常業務に活かしたいと考えている。

2. 英国の土木業界の労働環境／働き方

英国の土木業界の労働環境

【職場の雰囲気】

- 色々な国籍の方がいた。
- 男性技術職の方が多いが、日本よりは女性技術職の割合が高いと感じた。
- 日本とはものの見方が違い、日本の常識や暗黙の了解が通用しないことが多々あった。後から考えて、こういうものの見方だからこういう考えになるのかと腑に落ちることもあった。

【勤務時間・残業】

- 残業は多くなかった。忙しい時期には残業が増える社員もいるが、それでも19時までにはほとんどの人が帰っていた。

【福利厚生】

- 通勤費は給与に含まれているという考えで、各自負担することになっていた。

【休暇】

- 現地社員の有給取得率は、日本よりはるかに高かったと思う。

【給与水準・雇用の安定性】

- 給与水準は物価も違うことから正確には分からない。物価が上がれば、給与も上がるのだと思う。
- キャリアアップと昇給を求めて転職することがごく当たり前に行われている。

英国の土木技術者の働き方

【キャリア形成】

- 同じ会社での勤務をずっと続ける人は多くなく、転職をしながらより高いポジションや給与を実現していくイメージ。日本に比べると人材の流動性は高い。

【技術・スキル】

- 自然環境や社会環境が異なるので、日本の土木技術や基準をそのまま活用できることは、機械などのモノづくりと比べると少ないと思う。
- 技術に対する矜持の持ち方や技術に対する向き合い方など、技術者としての精神論については、共通していることが多いと感じた。

【その他】

- 頻繁ではないが、仕事帰りや金曜の昼休みに同僚とパブに行くことがあった。新しく輪に溶け込むのに飲みニケーションの場を活かすことは、現実的に取りやすい重要な手段だったと思う。

3. 英国で働くための準備／生活環境

英国で働くために行った準備等

【情報収集】

- グループ会社間の異動であり、基本的な準備をするのみで、特に心配はせずに渡航した。

【英語力】

- 赴任当初は散々な英語力であった。ビジネスにしっかりに対応するには、相当の英語力が必要であり、そういう意味では、赴任が終了しても十分な英語力が身につかなかったことは残念であった。
- 語学力と同時に、ビジネスの場でのとるべき振る舞いが日本国内のビジネスとは異なることにも理解と対応が必要。

【ビザ取得・資金準備】

- グループ会社間の異動のため、ビザの取得手続きには特に支障はなかった。

【その他】

- 銀行口座の開設には苦労した。
- 会社として経験を蓄積することで、よりスムーズに準備ができるようになっていくと思われます。

英国の生活環境

【住宅事情】

- 居住するエリアなどにもよるが、家賃は日本の方が安かったと言える。同じ価格帯であれば、設備は日本の方が良いと言えるのではないかと。
- 改装は行うにしても、日本よりも築年数が古い物件が多い。地震がないのも大きな理由だと思う。

【物価水準】

- 外食は非常に高価だった。赴任当時は、ラーメン、餃子、中瓶1本で3000円相当だった。
- 自炊をすれば物価は日本と同じくらいだと感じた。品質に関しては日本の方がいいことのほうが多いと感じた。

【交通・公共サービス事情】

- 公共交通に関する不便さはなかった。時間の正確性は日本の方が高い。
- 通勤時間帯のラッシュアワーには満員電車となることもあったが、日本に比べれば混雑度と発生頻度はマシであった。
- 公共サービスのサービスレベルは総じて日本の方がいいことが多いと思う。

【治安】

- 敢えてリスクを冒すようなことをしなければ、特に不安はなかった。

【英国で働いて／暮らして感じた魅力や苦労】

- 大きな不便はなかったが、契約関係やトラブルが起きて交渉しないといけない場面では苦労した。

4. 日本の土木業界のグローバル化推進に向けて

英国から日本の土木業界をみて感じる強みや課題

【課題】

- 国内でどんなに優秀で経験豊富な方でも、翌年から急に海外に出て、すぐに日本国内と同様の役割を担い成果を出すことはできないと思います。グローバル化の推進を担う人材を育てるためには、若いうちからしっかりと経験を積むことが極めて重要です。しかし、企業が経験を積む機会を与え必要な社員教育を行うということは、これまでは十分になされていません。
- 課題解決に向けた取り組みにはできるだけ多くの人に関わる方が良いので、同じ経験や考えを持つ人材を増やしてチームで対応できるようにしていく必要があります。
- 自らに海外経験がなくとも、部下の背中を気持ちよく押すようにするための、上司向けの教育を行う視点も必要だと思います。
- 社会に出る前の学校教育の変革も課題の一つとして考えられます。

今後海外で働くことを目指す土木技術者へのひとこと

- 海外で働きたいという意欲のある人はぜひトライしてください。いいことばかりではなくても、それも含めて楽しんでトライすることが重要だと思います。上司の方は、部下にトライしたい方がいれば全力でサポートしてあげてください。
- 日本の常識や自分の経験にとらわれてしまうと、うまくいかないことが多いです。日本での経験則に当てはめないクセをつけましょう。自分が外国人であることを忘れず、現地の考え方やものの見方を柔軟に素直に受け入れることで、適応力が鍛えられると思います。

事例集（国名：英国）

Eさん

職 種：技術職

専門分野：土木建造物の設計・維持管理

年 齢：40代

形 態：グループ会社への出向

これまでのキャリア

- 日本の大学の土木工学科
- 日本で民間企業に就職
- 国内業務を担当
- 海外グループ会社で勤務中（約3年間の予定）

【土木技術者を志した理由】

- 小さい頃にテレビコマーシャルを見て地図に残る仕事をしたいと思ったことや土木技術者だった叔父の話を聞き、橋梁などの大規模な構造物に携わりたいと考えた。
- 大学では土木工学科に進学。在学時に阪神淡路大震災を経験し、地震関連技術は今後の土木技術者としての活動に活かせるのではという考えや橋梁に携わりたいという思いから、耐震やコンクリート構造の研究室に進んだ。

【英国で働くことになった経緯、判断の分岐点等】

- 会社方針として、グループ企業との技術部門・技術者間の本格的な連携促進、相互理解の深化のために技術者派遣が決定された。
- 選任の際には、調査、計画、設計、施工、維持管理という両国で一般的な業務分野である土木設計技術者が良いとの判断があった。国内業務に従事していた自分が選任されるとは思っておらず驚いたが、海外勤務を経験するまたとないチャンスと捉え快諾した。

【英国での業務内容】

- グループ会社は、ビルの構造設計・設備設計、土木環境分野に関する公共事業のコンサルタント業務を行っている。土木技術者として構造物点検や構造物設計照査に従事。

【将来展望】

- 日本帰任後の所属・業務内容は未定。海外企業での勤務経験を自身の従事する業務や組織運営、グループ会社との連携促進に活かしたいと考えている。

2. 英国の土木業界の労働環境／働き方

英国の土木業界の労働環境

【職場の雰囲気】

- 社内イベントやチャリティーイベントを活用した社員間のコミュニケーション促進を図っており、職場の雰囲気は明るい。一方で、勤務時間中は作業に集中しており会話は少ない。昼食時も各人が適宜デスクでとることが多く雑談は比較的少ない。
- コロナ後でも在宅勤務者が多い。コミュニケーションや生産効率面での課題から、週3日以上の出社が励行された。

【勤務時間・残業】

- 基本の勤務時間は9時～17時半（昼休憩1時間）であるが、週に37.5時間働けばよい柔軟なフレックス制度を導入し、ある日に長く働いた代わりに別日の勤務時間の短縮が可能。
- 共働き家庭が多く、時短勤務や週3勤務等のフレキシブルワーキングの社員もいる。
- 残業が少なくワークライフバランスが高いと感じた。若手技術者は定時帰宅者が多い。ただし、管理職は比較的残業時間が多く、家に仕事を持ち帰ることもある。それでも日本に比べると残業時間はかなり少ないと思われる。

【給与水準・雇用の安定性】

- 英国企業の給与水準は詳しくは分からないが、役職や職種による給与差は日本よりも大きいのではないかと思う。
- 日本よりも女性技術者が多い。正社員として雇用され家庭状況等に応じたフレキシブルワーキングができる安心感がある。
- 現状では人手不足で建設関連に関わらず、どの企業でも人材を求めているが、雇用状況や景気が悪化したら余剰人員の解雇もある。

【福利厚生】

- 一般的に英国企業では住宅費や通勤費は給与に含まれているという扱いで別途に支給していない。

【休暇】

- 有給休暇（会社により異なるが約25日前後）と病気休暇が勤務年数に応じて付与される。有給休暇はとりやすい。
- 英国の祝日は、正月、クリスマス、バンクホリデーなどで年間8日、日本と比較すると10日も少ない。

英国の土木技術者の働き方

【キャリア形成】

- 転職でのステップアップが一般的なキャリア形成。数年単位でポストや給与が上がる会社に転職する社員が多い。
- 英国では発注者側技術者の転職も多く、民間企業と自治体などの公的機関を行き来するキャリア形成もある。

【グローバルトレンドへの対応】

- 新技術の導入に関しては積極的な姿勢があると感じる。

【技術・スキル】

- 要求される設計技術のレベルには大差はないと感じる。施工品質については日本の方が高いと感じる（緻密さ、出来栄）。
- 業務生産、業務受注や利益への寄与という観点から考えた場合、国内業務に従事していた中堅・ベテラン技術者が、海外企業で即戦力として日本と同等の活躍することはなかなか難しいと感じる。言葉の壁、基準や仕様ソフトの相違、商習慣や生活習慣等の種々の要因がある。

3. 英国で働くための準備／生活環境

英国で働くために行った準備等

【情報収集】

- 自分の専門分野に関する情報収集、グループ会社と連携の可能性ある技術メニューの整理等を行った。
- 現地生活をセットアップするための情報収集。しかし、コロナで情勢が変わりネット上の情報が古いなど苦労した。

【英語力】

- 語学が一番ネックだと感じたため、英会話学校に通った。

【ビザ取得・資金準備】

- グループ会社から身元保証書（CoS）を発行してもらい、在日英国大使館で申請した。

【その他】

- 住宅探し及び不具合修理、銀行口座開設は苦労した。

英国の生活環境

【物価水準】

- 日本と比べ物価が高いと感じる。ビール一杯（約600ml）で1千円以上、ちょっとしたランチで3千円以上、ディナーで8千円以上となり気楽に外食することは出来ない。
- 職場でも同僚とランチに行く文化はなく、多くの人が自家製サンドイッチやフルーツを机で食べていることが多い。
- スーパーなどの生鮮食品や生活必需品（トイレtpーパー、文房具、ガソリン等は除く）は日本と同じくらいの価格水準であるが品質が日本の方が良いと感じる。
- 電車代（ナショナルレール）が非常に高い。

【交通・公共サービス事情】

- 医療費は無料だが日本のサービス水準とは異なる。
- 高速道路が無料で利用しやすい。
- 鉄道のストライキが頻発する。突然キャンセルになることもあるが仕方がないこととして許容されている。公共のサービスに対する感覚が違うので理解が大変である。

【治安】

- 治安は悪くなく、危険な目に遭ったことはない。夜は出歩かない、危険そうなところには立ち入らないなど注意はしている。
- 日本よりはスリなどの軽犯罪は多いと聞く。

【英国で働いて／暮らして感じた魅力や苦労】

- 英国での勤務及び生活の魅力はワークライフバランスがとれていることである。日本と比べ、平日の勤務時間が短く、土日はきちんと休め、有給休暇も消化できる。管理職以上も含めてほぼすべての社員が同じような勤務形態であり、自分や家族との時間を楽しんでいると感じる。
- 苦労としてはやはり言葉の壁がある。文化の違いがいろいろあるなかで、言葉のせいで誤解が生まれる部分もあると感じる。

4. 日本の土木業界のグローバル化推進に向けて

英国から日本の土木業界をみて感じる強みや課題

【強み】

- 構造物の点検、施工、維持管理に対する新技術の活用などは英国でもトレンドになっており、日本の新技術を紹介すると興味を持ってもらえる。日本ではインフラ技術を海外展開しようとしているが推進していく価値があると思う。

【課題】

- 設計技術の観点からは、適用基準に定められる制限値を満たすよう適切に設計計算・図面作成・照査をする行為は同じであり、日本も英国も大きな差がないと思われる。施工技術では、出来上がったインフラ構造物は日本の方が品質が高いと感じる（例えば、コンクリート構造物の緻密さ・出来ばえ）。その一方で、日本では過剰な品質を要求しているのではないかと考えさせられた。
- 土木業界に限らないが英国ではの人材の流動性が高い。受注者側民間企業と発注者側の公的機関を行き来しキャリアを築く人も多く、各技術者のネットワークと信頼関係で仕事を獲得していくことがある。数年で赴任者が入れ替わる日本企業方式では現地ネットワークが途切れてしまうことが多くもったいないという話をきく。

今後海外で働くことを目指す土木技術者へのひとこと

- 土木構造物の設計技術者として海外での活動を考えている方は、日本独自の設計計算/解析ソフトではなく、海外でも使用されている設計/解析ソフトを使用・習得するとよい。また、基本的な設計計算は手計算やエクセル処理で出来るようになるとなお良いと思う。
- 英国で土木技術者として活躍できるか否かの評価は、どういった企業で勤務するか、語学の堪能さ、若手技術者か中堅・ベテラン技術者か、求める待遇/給与により一律ではないため難しい。語学が堪能な若手技術者、語学が堪能でなくとも技術力や経験が豊富な技術者であれば、英国新卒社員と同様の活動ができるのではないかとと思う（待遇・給与は新入社員レベル程度となるかも知れませんが）。業務に従事しながらスキルアップし、数年かけてに待遇が改善されることを目指すことになるのではないかと。

Fさん

業種：**研究職**

専門分野：**交通計画**

年齢：**40代**

形態：**現地大学への就職**

これまでのキャリア

- 日本の大学の土木工学科卒
- 鉄道会社に就職
- 英国の大学の博士課程に進学
- 同大学でのResearcherポストに採用
- 同大学でのLecturerポストに昇格
- 同大学でのAssociate Professorポストに昇格

【土木技術者を志した理由】

- 都市やインフラを創ることに興味があり土木工学科に進学した。
- 大学では交通計画研究室に所属した。
- 卒業後は鉄道会社で就職し、主に駅改良工事の発注や施工管理、設計業務を担当した。

【英国で働くことになった経緯、判断の分岐点等】

- もともと研究という仕事に興味があり、修士課程終了後に鉄道会社で働いた後に博士課程に進学する決断をしたこと、また、その際に進学先として英国の現大学を選択したことが分岐点だった。
- 日本で博士課程に進学をすることも考えたが、自分の研究対象（自分が何をしたいか）及び修了後の展開を考え、留学するという結論に至った。結論を出した後には英語を含めて多くの準備を行った。
- その後、進学先の大学でResearcherポストの募集があり、採用されたことで働くことになった。
- 鉄道は土木の中でも特殊な領域であり、鉄道会社で得た鉄道オペレーションの経験は英国においても役立った。

【英国での業務内容】

- 大学で交通計画（公共交通・鉄道・歩行者等）を専門に研究を行っている。

【将来展望】

- このまま大学で研究を継続？

2. 英国の土木業界の働き方 / 3. 英国で働くための準備

英国の土木技術者の働き方

【技術・スキル】

- 自分の専門である輸送管理システムの分野では、技術面で日本と英国のどちらの方が進んでいるということはない。
- ユニークな自社技術を開発して有する会社は他国でも通用すると思う。また個人でも日本でユニークなことを長く専門にしてきた方は他国でも通用すると思う。

【グローバルトレンドへの対応】

- 仕事で付き合いのある英国内の企業も、もとはフランスやスペイン等の会社である等、英国では多国籍化が進んでいる。

英国で働くために行った準備等

【英語力】

- 英語には苦労した。日本人は聞くことや話すことが苦手だというのは分かっていたが、書くことにも大変苦労した。
- 実務英語の上達には実際に使う機会をどれだけ持てるかが大きい。「独学でも頑張れば大丈夫」と努力する人が多いと思うが、効率の良いアプローチをとらないと時間を浪費すると思う。
- 留学試験英語は特殊なので、試験が何を求めているのかを把握し、それに対して効率的な対応方法を取ることが重要。全般的な英語力の向上も必要だが、自分の経験を振り返るとそのための情報収集をもっと早めにしておけばよかったと思う。
- 効果的な勉強方法については、インターネットでの情報収集・経験者に話を聞くなど、調べる必要がある。

【就職活動】

- 大学教員の立場から見て、日本人が英国で働く典型的なパターンとしては、英国の大学に留学してそのまま英国で仕事を見つけて働くというケースが多い。そのような人は英語や英国でのコミュニケーションの仕方に慣れていると採用担当者に判断されるようである。
- 高校や大学入学準備コースから英国に来ている留学経験の長い人の中には、現地人と同じくポテンシャル枠で採用される人もいるが、使える解析手法や入学前の実務経験などが評価され、即戦力を求められるジョブ型で採用される人が多い。
- 英国は日本以上にネットワーキングが重要で、学生時代から将来を考えて英国土木学会の学生・若手部会の会合やその他業界団体の会合に積極的に出席し、若手幹事などを熱心にやっている人は仕事を見つけている。
- ブレキジットによってEU加盟国出身者が優先されていた制度がなくなり、EU外出身者にもチャンスが増えた。例として、今年には自分の研究室のアジア出身の修士課程修了者にも、英語がある程度使える人であれば、1年間の修士課程修了後に英国で仕事を得る方も出てきた。昨年の場合、まじめに就職活動をした修士学生のうち英国で職を見つけることができたのは勤務経験がある人で半分以上、勤務経験のない人で2割程度という感覚である。
- ただし、英国の経済状況や土木プロジェクトの状況、政治の状況にもよるので、同じ状況がどれだけ続くかは不透明である。また、ビザの制度は朝令暮改で、「留学→現地就職」というプランはリスクを伴うとも思う。

4. 日本の土木業界のグローバル化推進に向けて

英国から日本の土木業界をみて感じる強みや課題

【強み】

- 多くの日本企業が有している先輩が後輩を育てる体制や社員研修など「技術を伝達する仕組み」はユニークであり、日本の強みになると思う。ただし、これらは簡単なものではなく、長期に渡って人を育てる仕組みは社員が同じ会社で退職までいることを前提としたものであるため、海外に適用する場合には現地の状況に応じてアレンジする必要があると思う。
- 現場で一体となり、問題を解決する「現場力」は日本の方がはるかにあると思う。これらは日本人の気質による部分もあると思うが、日本の強みにもなるように思う。
- 英国人で「昔、日本に滞在したことがあり、いい思い出をした」という人に会うことが多い（自分が日本人だからということもあるが）。短期的な利益にとらわれず、相手の立場も考え一緒に行動するという日本人気風は、インフラビジネスにあうと思う。

【課題】

- 近年は多様化し始めているが、海外(留学・勤務)経験者また外国人の採用・運用は、未だどうしたらいいのかよく分からない、という会社が多いのではないか。事例を共有するなど学会で取り組んで欲しい。またそれらの人に対する業界によるサポートも必要。
- アジアでは「昔、日本に留学した」という人によく会う。政府や企業のシニアポジションにいる人も多い。これは土木を超えた日本の資産であり、これを今後どのように生かすかを、業界全体で考えてほしい。

今後海外で働くことを目指す土木技術者へのひとこと

- 技術は世界に通用する。ただ土木は基本的に経験工学であり、自分の技術ポートフォリオは自分で主体的に管理しなければいけない（会社は想像以上に色々と考慮してくれるが、会社には会社の都合もある）。常に自分が成長できる領域を探し、必要以上にもう一歩踏まなければならないと思う。そのような考えをして、もし海外が選択肢に含まれるなら、是非挑戦してほしい。